

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H01603

研究課題名(和文)「パブリック都市計画史」の理論的・実践的探求

研究課題名(英文) Theoretical and Practical Study on "Public Planning History"

研究代表者

中島 直人 (Nakajima, Naoto)

東京大学・大学院工学系研究科(工学部)・准教授

研究者番号：30345079

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では都市計画史研究の社会への還元を主題とした際に立ち現れる「非専門家も対象とした反省的知識」を構築する都市計画史領域「パブリック都市計画史」の方法的特質や課題について、理論と実践の両面から探究した。『都市計画史ハンドブック』の読解により「パブリック都市計画史」の方法論的定置が未確定なこと、国内外事例をテキスト・ビジュアル、定着的・イベント的という2軸の枠組みで分析し、特にニューヨーク市でのパブリック都市計画史の展開が各領域にまたがる構図を持つこと、高島平ヘリテージプロジェクトやアーバニズム・プレイス展2018におけるアンケート調査から、非専門家の都市計画史に関する評価傾向を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は従来の都市計画史研究の学術領域を拡張するという大きな枠組みの点で、学術的な意義を有する。また、社会的意義としては、都市計画史研究が社会に貢献する一つの方法としてのパブリック都市計画史の課題とともに、可能性を示したことである。特に実践的な取り組みから知見を得た経験は、学術的および社会的両方の意義を有する。

研究成果の概要(英文)：This study explored the methodological characteristics and challenges of "public planning history," a field of planning history that constructs "reflective knowledge for non-specialists" that emerges when the subject is the return of planning history research to society, from both theoretical and practical perspectives. Through a reading of the Routledge Handbook of Planning History, it was founded that the methodological position of "public planning history" has not yet been determined. By analyzing cases within the framework of the two axes of "textual/visual" and "permanent/event", it was shown that the development of public planning history, particularly in New York City, has a composition that spans each field. Questionnaire survey at the Takashimadaira Heritage Project and Urbanism Place Exhibition 2018 revealed trends in the evaluation of planning history by non-specialists.

研究分野：都市計画

キーワード：都市計画史 都市計画遺産 展覧会デザイン

1. 研究開始当初の背景

研究領域として40年近くの歴史を有する我国の都市計画史研究において、石田頼房、渡辺俊一、越澤明という3人のパイオニアそれぞれのアプローチ、すなわち「都市計画は一体どこから来て、どこへ向かって発展していくのか？」を問う石田の通史展望アプローチ、「都市計画とは本質的には一体何なのか？」を問う渡辺の本質探求アプローチ、「都市計画は一体どのような遺産を生み出してきたのか？」を問う越澤の計画遺産アプローチは、後進の都市計画史研究者に大きな影響を与えてきた。しかし一方で、2000年代以降の都市計画史研究者たちの関心の向く先は、具体の都市空間の歴史性や個性へのまなざしを媒介として都市計画史を現代の都市計画やまちづくりに接続することにあると指摘されており、そうした志向性の先にこの3つのアプローチの「次にくるもの」が構想されつつある。新たなアプローチの構想の鍵となるのは都市計画史研究の社会への還元という視点である。都市計画史研究は「専門家を対象とした都市計画史」であるという前提があったが、近年、この前提を外して、都市計画史研究と社会との関係を再考していこうとする議論が見られるようになってきている。住民参加、市民主導・地域主体の「まちづくり」の経験が蓄積されていく中で、都市計画史研究のあり方自体も広がりを見せている。

こうした傾向は「開かれた都市計画史」志向と呼べる。2000年代半ばにアメリカ社会学会にて提起され、議論を呼んだ「パブリック社会学」を巡る枠組みを援用すれば、「何のための都市計画史研究か」という問いに対応する手段的知識(Instrumental Knowledge) 反省的知識(Reflexive Knowledge)軸がまず設定される。ここでの手段的知識とは、都市計画の技術とその運用に関する知識であり、反省的知識とは都市計画の技術を支える都市計画の目的や価値に関する知識である。都市計画を手段として捉え、その手段の改良や運用方法の模索を行うことと、そもそも都市計画を成立させる枠組みや基盤から問い直すこと、その両極の振れの中に都市計画史研究が存在している。そして、もう一つの「誰のための都市計画史研究か」という問いに対応するのは、都市計画分野の特性を勘案して、ブラウオイの学者集団 非学者集団という軸を研究的専門家 実践的専門家 非専門家という段階を有する軸に敷衍するのが適当である。こうして、2つの軸からなる座標系に都市計画史研究の4つの理念型が措定される。

都市計画史や都市計画研究者を主な対象に、厳密な方法論や分析枠組みを駆使して、歴史的な事実を明らかにしていく、職人的な研究技法を駆使したプロフェッショナル都市計画史、例えば都市保全計画分野の制度設計や政策評価、計画立案などへの関与を前提に実施される応用的な都市計画史研究であるポリシー都市計画史、都市計画の歴史的事象を通じて、都市計画の目的や価値を吟味し、その再認識、再構築を迫る、都市計画論、都市論としての性格を帯びたクリティカル都市計画史という3つの都市計画史の先に、研究者そして専門家ではない人びとの公共資産としての反省的知識と関係するパブリック都市計画史が措定される。それはどのように都市を動かしていくのだろうか

2. 研究の目的

本研究の目的はこれまでの都市計画史研究の方法に関する俯瞰的整理を行った上で、都市計画史研究の社会への還元を主題とした際に立ち現れる「非専門家も対象とした反省的知識」を構築する都市計画史という領域を「パブリック都市計画史」として措定し、その方法的特質や課題、可能性について、理論と実践の両面から明らかにすることである。学術的な独自性は、背景にて3つのパイオニアたちのアプローチの乗り越えというかたちで提示した。もちろん「パブリック都市計画史」と呼びうる取り組み自体は各所で見られるが、総体的、理論的な把握には至っていない。実践面では「パブリック都市計画史」は究極的には地域が共有する都市計画のある種の物語であり、地域自身が発見していく都市計画史である点、都市計画史研究者が地域の中で地域のコミュニティとともに研究を進める点に創造性が含まれている。

3. 研究の方法

本研究は、具体的には(1)都市計画史研究の俯瞰的整理と「パブリック都市計画史」の方法論的定置、(2)「パブリック都市計画史」の国内外事例分析、(3)「パブリック都市計画史」の実践で構成される。では、日本の都市計画史研究の研究史を先の4つの理念型を念頭に置きながら整理するとともに、都市計画史研究をめぐる議論の世界水準の把握のために、国際都市計画史学会の主要メンバーが分担執筆し書籍の批判的読解を行い、「パブリック都市計画史」の理論的位置づけを国内およびグローバルな文脈から明らかにする。では、国内外主要都市での、市町村史をはじめとする行政刊行物や多様な民間出版物、ミュージアムやアーカイブ、ウェブサイトやSNSにおける都市計画史情報・企画、それらへのアクセシビリティとインパクト、特定の都市計画遺産を巡る言説や活用の取り組みプロセスの整理を行う。では、何れも研究代表者が主導的立場で着手しているアーバンデザインセンター高島平の地域連携プロジェクトとして実施している高島平ヘリテージプロジェクト、日本都市計画学会都市計画法50年・100年企画特別委員会による都市計画アーカイブプレイスという二つの実践プロジェクトの運営を通じ

て、「パブリック都市計画史」の実践上の課題や期待される効果を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 都市計画史研究の俯瞰的整理と「パブリック都市計画史」の方法論的定置

カロラ・ハイン編『都市計画史ハンドブック』(The Routledge Handbook of Planning History Edited by Carola Hein, 2018)について、その内容を読解した。この書籍は、2015年7月に3日間にわたりデルフト工科大学で開催された都市計画史ワークショップでの発表、議論をベースとして、都市計画史研究の歴史や方法、テーマに関する多様なトピックを包括的、体系的に解説した、都市計画史分野では初めてのハンドブックである。4部38章で構成されている。国際都市計画史学会をはじめとした国際的な都市計画史研究の場で活躍する一線級の研究者たちが、決して多くない紙幅の中でもそれぞれのトピックについての俯瞰、将来展望を試みる良質な論考を寄せている。以下、書籍の抄録を掲載する。

抄録

本書は、19世紀半ばに欧米にて誕生した近代都市計画の歴史を探求する。欧米豪を中心とした伝統的な都市計画史の記述を認めつつも、脱中心化を志向したグローバルなアプローチ、テーマに基づく新しい都市計画史の方法を紹介していく。英雄やユニークなアイデアの歴史という伝統的な都市計画史の描き方を乗り越え、新しいグローバルな立ち位置と新しいアプローチの両方を提供し、都市計画史の輪郭を問い直し、他の学問領域を取り込み、まだ知られていない地域を探求する。本書は英語文献にのみ焦点を当てることのバイアスを乗り越える最初のステップを確立し、学際的で、多文化的でポストコロナルなアプローチを開発する。都市計画史分野の状況、その到達点や欠点、将来の課題を明らかにする本書は、都市計画史分野を定義する基盤となり、研究者や実践家、学生たちが革新的な研究を行うための契機を提供する。

都市計画や都市計画史の広範な成果、課題、需要を扱うために、本書は「都市計画の歴史を描くこと」と「都市計画史の歴史を描くこと」の両方を探求する。そのバランスは章によって様々である。本書は都市計画史の学術的な記述、コアとなる書物、重要な人物、組織、推進者、教育、実践に対する洞察を提供する。都市計画史の記述を地理的、時間的な関係の中で位置づけ、理論、方法論、スケール、文化を考察していく。

本書の歴史的考察の対象は、近代都市計画の始まりである19世紀半ば以降の時期が中心となる。歴史分析と将来の都市計画への洞察の両者を豊かなものにするために、この本は都市計画史がどのように書かれ、教えられているかに注意を払う。それぞれの著者は今後の探求のための新しい展望を提示し、都市計画史家の活発な取り組みにも関わらず、いまだ体系化がなされていない分野の文献を特定する。

本書は、4つの部と補足とで構成されている。第一部は「主体、理論、方法、類型」についての最先端の問いを解説している。この4つは国際都市計画史学会の著名な研究者たちの著作を通じて、都市計画史のサブ領域として時間をかけてかたちづくられてきたものである。これらの探求が、第二部「時間、場所、文化」において現在の学問では見落とされているトピック群の説明を始める舞台を用意し、欧米的都市計画史からグローバルな都市計画史への展開、グローバルな言語システムにおけるグローバルな分析のための枠組みの開拓へとつなげていく。欧米や日本だけでなく、ロシア、中国、東南アジア、アラブ、アフリカなどの都市計画史が取り上げられる。そのあとに続く章たちは、地域的な物語、特定の政治的、経済的、社会的、文化的枠組みに関するものである。第三部「場所とダイナミクス：課題、運動、テーマ、論争」では、学際的で国境を越えた探求に取り組み、新しい、未開発の場所やダイナミクスへと研究を導いていく幅広く場所、類型に基づいた都市計画史のアプローチが明らかにされる。例えば、インフラ、住宅、参加、災害、遺産保全などのテーマが取り上げられる。都市計画史の「将来」についての第四部は、現在の研究の焦点と将来の研究のために開かれつつある展望を指し示すことで、今後の研究に役立つトピックを明らかにするエッセイで構成されている。各部はそれぞれの時系列的、テーマ的、学術的論理を有している。

しかしこの書籍の中では、「パブリック都市計画史」自体は明確に論じられていない。都市計画史は「都市や地域、国家における過去の都市計画の影響を理解すること、専門家の実践としての都市計画の将来を想像する手助けをする」(p.5)であり、「実践家の技術と科学を明らかにし、専門性の基礎となる知識に貢献することを通じて、都市計画における実践と理論との間の相互作用を記録することが都市計画史家の主要な役割となる」(p.475)のである。「パブリック都市計画史」はその先の展開として位置付けられる。

(2) 「パブリック都市計画史」の国内外事例分析

国内外のパブリック都市計画史事例を収集し、叙述のスタイルを、テキスト・ビジュアル、定着的・イベント的という2軸で整理を行った。特にニューヨーク市の1960年代を中心とする都市計画史については、ジェイン・ジェイコブズとロバート・モーゼスという時代の代弁者を中心

の対象として、展覧会「Robert Moses and the modern city」(2007年)、展覧会「In the Shadow of the Highway Robert Moses' Expressway and the Battle for Downtown」(2015年)、映画「Citizen Jane: Battle For The City」(2016年)、若年層向けの書籍「Genius of Common Sense: Jane Jacobs and the Story of the Death and Life of Great American Cities」(2012年)、漫画「Robert Moses: The Master Builder of New York City」(2014年)、オペラ「A Marvelous Order an opera about Robert Moses and Jane Jacobs」(2016年)など、多様なメディアを通じて、互いに連関した総合的な展開が行われていることを確認し、各領域にまたがる構図を整理した。

一方で、研究分担者も主体的に関与する城南住宅組合史料調査プロジェクト「城南アーカイブス」などの事例では、叙述のスタイルとは別に、叙述の主体に関して、専門家だけでなく、非専門家、さらには専門家と非専門家の両者の協働というかたちが見られた。「パブリック都市計画史」において、対象としての「非専門家」ではなく、都市計画史の主体としての「非専門家」について探究する必要性が確認された。

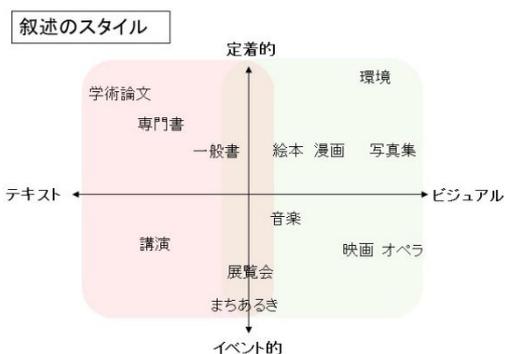


図1 パブリック都市計画史の叙述スタイル分類

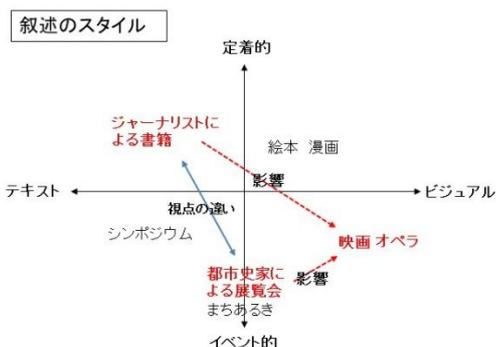


図2 ニューヨークにおけるパブリック都市計画史の構図

(3)「パブリック都市計画史」の実践

実践的検証として、アーバンデザインセンター高島平による高島平ヘリテージプロジェクトの実施、日本都市計画学会都市計画法50年・100年企画特別委員会主催のアーバニズム・プレイス展2018の開催を行った。

高島平ヘリテージプロジェクト

東京西郊20km圏に位置している板橋区高島平は、1960年代の日本住宅公団による土地区画整理事業によって造成された計画的市街地である。2017年に公民連携による再生を進めるために設立されたアーバンデザインセンター高島平の活動の一環として、「高島平の歴史的文脈の掘り起こしを通じて住民、市民の自分たちの地域環境に対する関心、愛着を喚起・醸成すること」を目的に、高島平ヘリテージプロジェクトを実施した。具体的には東京大学の大学院生と地域住民が勉強会、調査を重ね、2019年1月から3月にかけて板橋区役所ギャラリーモールにて「高島平ヘリテージ50 高島平をかたちづけてきた50の都市空間」展を開催した。同内容は2019年3月3日に高島平公民館で開催された高島平50周年記念イベントでも展示された。その後、ヘリテージまちあるきおよびワークショップを継続的に開催した。特に50周年記念イベントでの展覧会については、来場者アンケートを実施し、地域住民のヘリテージに関する評価傾向を調査した。その結果、1) 地域外の遺産も含め立地を問わず広く関心が集まること、2) どの形成時期のヘリテージにも関心が集まるが地域住民の年代により関心傾向が異なること、3) 空間的広がりを持つ遺産は年代を問わず関心を集めること、などが明らかになった。

表1 展示した高島平ヘリテージ50一覧

番号	名称	立地	時期	番号	名称	立地	時期
1	高島駅前と歩天塚	6	A	26	スタイリッシュな住宅/マンション	8	C
2	橋の名が伝ふる村の構造	8	A	27	丸屋根の高島平駅舎	8	C
3	崖上から降りてくる坂道たち	0	A	28	向こう岸のガスタンク	0	C
4	坂道に咲く草花・数えきれぬ記憶	0	A	29	それでも足りなかった保育園	7	C
5	荒川に流れていた前谷津川	2,8	A	30	「島」を引継ぐ区民農園	4	C
6	境界としての新河津川	0	A	31	高島平ロードレース、駆けつける都市空間	2,3	C
7	駅前スーパーに抱え込まれた運徳川	0	A	32	まちのために使われてきた一等地	3	C
8	もともとの道を消かした街路	1	A	33	「人」が決められた街路を待つ広場・通り	2	C
9	定点としての大東文化大学	1	A	34	区民館とコミュニティ道路	3	C
10	ランドマークとしての板橋清掃工場	9	A	35	盛り場としての高島平商店街	8	C
11	板橋土地区画整理事業と9つの高島平	8	B	36	住民運動の成果としての高島平図書館	3	C
12	高島平が引寄せた地下鉄6号線	0	B	37	自主管理歩道が通る街並み	1,7-9	C
13	条件変更から生まれた高層団地景観	2	B	38	西高島平駅の三層立体交差	0	C
14	団地生活の中心としての広場	2	B	39	平らなまちの転輪車	8	C
15	団地の住棟、設計の工夫	2	B	40	増築化によって生まれた前谷津川緑道	1,8,9	C
16	記憶とともにある樹木たち	3	B	41	穴の橋の穴窓	1,2	C
17	二つの顔を持つ車庫公園	3	B	42	高二小前の小さな親迎空間	2	C
18	緑地帯としての高島平緑地	2-5	B	43	駅構内長のケヤキ並木	2,3	C
19	緑地帯の上の高島平団地	9	B	44	おまつりの舞台としてのまち	3	C
20	1丁が突える百部高道5号線	0	B	45	鷹巣の木の立体駐車場	2	C
21	もう一つの橋、トラファレミアムと団地	6	B	46	防災の要、高島平一号線	6-9	C
22	板橋市場・戦後部の大型商業市街	6	B	47	運路の上でつながるショッピングセンター	9	C
23	五丁目「駅構内の商業街・自由が丘」	5	B	48	団地ストロークのランパーション	2	C
24	三層一丁目と三層階段	0	B	49	福祉・コミュニティのための様々な空間	8	C
25	駅前駅の高島平型有線	1	C	50	駅にむくみ部民館/マンション/テナント	8	C

表2 各ヘリテージの立地と関心の関係

町丁目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	総計
ヘリテージ数 (H)	4	13	9	2	2	4	3	11	6	9	63
回答数 (A)	5	26	7	5	7	4	3	14	10	16	97
A/H	1.25	2.00	0.78	2.50	3.50	1.00	1.00	1.27	1.67	1.78	1.54

*町丁目の0の項目は高島平1〜9丁目外のヘリテージを示す

表5 関心を持ったヘリテージの形成時期と回答者の年代の関係

形成時期	A	B	C	総計
高校生以下				1
30代	1	5	9	15
40代	3	10	9	22
50代	2	7	6	15
60代	1	1	3	5
70代	13	6	1	20
80代以上				0
無回答		1		1
総計	20	31	28	79

アーバニズム・プレイス展 2018

2018年9月15日から23日にかけて、新宿三井ビルディングにて「アーバニズム・プレイス展 2018 都市計画の過去と未来の創庫」(以下、UPE2018 と表記する)を開催した。都市計画法制定100年、全面改正50年を記念して、都市計画が生み出してきた都市空間という視点からこれまでの都市計画の歩みを整理すると同時に、これからの都市計画を展望しようという目的で企画したものである。展覧会のメインとなるコンテンツは、都市計画がこれまでに生み出してきた広場をカタログ的に紹介する「Great Public Places since 1919」と、55HIROBAの計画・設計の意図やプロセス、さらには新宿西口超高層ビル街や新宿駅周辺での広場形成の歴史的展開を伝える「Shinjuku Public Place Chronicle」であった。

都市計画遺産を展示コンセプトの中心に据えたUPE2018では、展示デザインの基本的方針として、その場の日常的な空間利用の中に展示物を自然なかたちで織り込むこととした。また、「Shinjuku Public Place Chronicle」では、新宿三井ビルディングの2階ロビーのラウンジスペースに設置されているスタンディング形式で利用するロングテーブルの細長い形状を活かし、年譜形式でのパネルを作成し、テーブル表面にはめ込むこととした。また、UPE2018では、これまでに生み出されてきた都市計画遺産としての広場ストックについて、その活用・再生という観点も展示に含めることにした。具体的には、東京都内4カ所で開催された空間の暫定利用・社会実験で実際に使われた空間創出ツール、ファニチャーを展示品として配置する「Place Making Exhibition」、4回にわたるトークイベント「Place Talk」を実施した。

「Shinjuku Public Place Chronicle」来場者および「Place Talk」参加者にアンケートを実施し、参加者の属性や評価傾向を把握した(有効回答数133)。属性については、性別、年齢(年代)、建築・都市計画に関する専門性を把握した。展覧会の評価については、4つの企画それぞれについての満足度に関する5段階評価と、展覧会全体の評価について、背景で述べた都市計画史研究の4つの理念型を応用した期待される4つの効果に関する5段階評価を実施した。都市・建築関係の専門家と非専門家のそれぞれの評価点の差分から、都市・建築関係の専門性の有無による評価傾向の違いについて考察を行うこととした。各企画の評価については、日常利用と併存しているものの、日常利用者数が必ずしも多くなく、落ち着いて展示を鑑賞することができた「Shinjuku Public Place Chronicle」、ステージやデッキ下など周囲からは切り離された会場で、トークに集中して耳を傾けることができた「Place Talk」の満足度が、他の2つの企画に比べて高い満足度であった。一方で、都市・建築関係の専門性の有無で評価が大きく異なる傾向が見られたのも「Shinjuku Public Place Chronicle」と「Place Talk」であった。前者は図面資料や建築家・都市計画家の言葉で新宿の広場の歴史を詳細に解説する内容であり、専門性のある人たちからの評価が高かった。一方で、後者はトークという性質上、展示よりも内容が理解しやすいこともあって、専門家でない人たちからの評価が高いという傾向がみられた。UPE2018全体については、「都市計画の歴史について新たな知識を得ることができた」という評価が「身の回りの都市空間や場所についての見方が変わった」評価を大きく上回った。しかし、属性でみると、都市・建築関係の専門性の有無で評価が異なった。専門家が「都市計画のこれからは役立つ知見を得ることができた」点を評価したのに対して、非専門家は「身の回りの都市空間や場所についての見方が変わった」点を評価する傾向が見られた。つまり、都市計画展覧会が有する効用は、建築・都市関係の専門家に対しては都市計画に直接役に立つ知見として効いてくるのに対して、非専門家に対しては、身の回りの都市空間に対する認識の変化に関わる効用がより大きいことも確認できた。専門家、非専門家それぞれのこうした評価傾向を踏まえて、「パブリック都市計画史」の具体的実践として展示デザインを行っていく必要性が示唆されたのである。

表3 アーバニズム・プレイス展 2018 の展示内容

名称	● Great Public Places	● Shinjuku Public Place Chronicle	● Place Making Exhibition	● Place Talk
内容・趣旨	1919年の都市計画法制定以降に生み出された35の都市広場について、その整備背景や当時の法制度、社会状況、設計家や会田等について解説する。	55HIROBAおよび新宿副都心の見直し、そして新宿副都心の広場がどのようにして生み出されたのか、その経緯や会田等について解説する。	都市空間ストックの活用提案としてのプレイスメイキングを、新宿副都心の取り組みが実際に使われたファニチャーを通じて解説する。 ①Shinjuku Share Lounge (新宿広場) ②nest marche (豊島区広場) ③丸の内線通りアーバンテラス (丸の内線沿いの内) ④橋本駅前コロシアム (橋本広場)	展覧会の展示内容と関係の深い以下のテーマについて、ゲストとともに議論を行う。 ①9月18日 アーバニズム・プレイス・プレイスジョイント ②9月18日 新宿三井ビル・55HIROBAの歴史と再生 ③9月21日 新宿からの都市の広場 ④9月23日 広場を直し都市計画へ
展示場所	新宿三井ビルディング 81階 55HIROBA	新宿三井ビルディング 2階ロビー 55HQAREsouth	新宿三井ビルディング 1階デッキ	新宿三井ビルディング 81階 55HIROBA
展示方法	既設テーブルにポスターを貼り、ビジュアルでコーディネートする。広場の写真には、自然と展示品が混ざりあうようにする。同時に、パネルと同等の情報をInstagramでも公開し、拡散できるようにした。	ロングテーブルの裏面に単体のパネルを設置し、図面資料を展示することで、ワークスペースの確保と整理させた。また、パターンの壁面装飾を確立した。	デッキ上はプレイスメイキング関係のファニチャーを都市プロジェクトの試験モデルとして設置し、デッキ上の広場のデモンストレーションを行った。	55HIROBAのデッキ上をステージとして、広場案件に繋がれたため、トークを行った。
来場者	平均来場者数 43人 ※30分ごとの来場者数を確認 ※来場者は性別がほぼ均等	延べ人数 475人 ・9月15日・16日のデータは欠損	延べ人数 196人 ・9月15日・16日のデータは欠損	延べ人数 122人 ①:19人、②:23人、③:37人、④:43人 ※はステージ上の人数のみをカウント

表4 アーバニズム・プレイス展 2018 におけるアンケートの回答結果

個別展示の評価	Great Public Places	Shinjuku Public Place Chronicle	Place Making Exhibition	Place Talk
	平均値 (1:非常に面白かった 2:面白かった 3:普通 4:退屈であった 5:非常に退屈であった)			
全体(133)	1.92	1.59	2.13	1.46
a1 都市・建築関係の専門家(106)	1.93	1.55	2.16	1.52
a2 上記以外(27)	2.00	1.79	2.18	1.27
差分(a2-a1)	0.07	0.24	0.02	-0.24
展覧会全体の評価	都市計画の歴史について新たな知識を得ることができた	都市計画のこれからは役立つ知見を得ることができた	都市計画とは何かについて改めて考えさせられた	身の回りの都市空間や場所についての見方が変わった
	平均値 (1:はい 2: 3:どちらとも言えない 4: 5:いいえ)			
全体(133)	1.50	1.66	1.63	1.85
b1 都市・建築関係の専門家(106)	1.52	1.62	1.62	1.89
b2 上記以外(27)	1.52	1.65	1.70	1.70
差分(b2-b1)	0.00	0.23	0.08	-0.18

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中島 直人, 永野 真義, 杉崎 和久, 中野 卓, 園田 聡, 高野 哲矢, 長谷川 隆三, 湯澤 晶子	4. 巻 26 巻 63 号
2. 論文標題 アーバニズム・プレイス展2018の展示デザインと来場者評価傾向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会技術報告集	6. 最初と最後の頁 713-718
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中島直人	4. 巻 38
2. 論文標題 アーバニズムとアーバニスト 成熟していく都市の循環的な都市デザイン像を求めて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 都市+デザイン	6. 最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島直人	4. 巻 5巻1号
2. 論文標題 未来のための高島平のこれまで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高島平学	6. 最初と最後の頁 31 - 39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島直人	4. 巻 338
2. 論文標題 「アーバニズム・プレイス展2018」という場の創出	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 都市計画	6. 最初と最後の頁 88-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島直人	4. 巻 339
2. 論文標題 都市計画法100年と銀座の150年	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 都市計画	6. 最初と最後の頁 24-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玄田悠大・中島直人	4. 巻 762
2. 論文標題 タイ・バンコクにおける国家・都市の近代化実験空間に関する研究 - ラーマ6世治世期 (1910-1925) を中心として -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 1727-1737
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.84.1727	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Naoto Nakajima	4. 巻 36(1)
2. 論文標題 Designing the 2018 Urbanism places exhibition and public planning history	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Planning Perspectives	6. 最初と最後の頁 195-205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/02665433.2020.1806724	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 藤原大樹・筋川展・松本大知・中島直人
2. 発表標題 半世紀を経過した計画的市街地における「ヘリテージ」への関心傾向 「高島平ヘリテージ 高島平をかたちづけてきた 50 の都市空間」展での地域住民アンケートを通じて
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 UDCTak高島平ヘリテージプロジェクト編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 地域貢献会社にご	5. 総ページ数 132
3. 書名 高島平ヘリテージ 高島平をかたちづくってきた50の都市空間	

1. 著者名 中島直人	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 408
3. 書名 都市計画の思想と場所 日本近現代都市計画史ノート	

1. 著者名 横文彦・真壁智治編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 NTT出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 アナザー・ユートピア 「オープンスペース」から都市を考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

都市計画遺産ネットワーク http://planning-heritage.net/ 都市計画遺産ネットワーク http://www.planning-heritage.net/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中野 茂夫 (Nakano Shigeo) (00396607)	大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授 (24402)	
研究分担者	佐野 浩祥 (Sano Hiroyoshi) (50449310)	東洋大学・国際観光学部・教授 (32663)	
研究分担者	中島 伸 (Nakajima Shin) (50706942)	東京都市大学・都市生活学部・講師 (32678)	
研究分担者	初田 香成 (Hatsuda Kosei) (70545780)	工学院大学・建築学部(公私立大学の部局等)・准教授 (32613)	
研究分担者	西成 典久 (Nishinari Norihisa) (90550111)	香川大学・経済学部・教授 (16201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関